

佐賀医学史話

宇和島藩と伊東玄朴の種痘

宇和島藩と佐賀藩とは深い姻戚関係がある。五代藩主伊達村侯（むらとき）、七代宗紀（むねただ）、八代宗城（むねなり）の、それぞれの正室が五代宗茂の娘護姫（もりひめ）、八代治茂の娘観姫（みよひめ）、九代斉直の娘猶姫（なおひめ）である。

そのため、伊達宗城は、佐賀藩の科学技術導入を手本に西洋軍制の導入に熱心であった。医学の面でも西洋医学に関心をもち、伊東玄朴のもとへ藩医富沢礼中を学ばせている。

伊東玄朴は、大槻磐溪の娘らに腕種人痘法を施して成功した。腕種人痘法とは、天然痘に罹って治った人間の痘痂を粉にして、腕に擦りつけ、軽い天然痘に感



8代藩主伊達宗城

染させる方法である。これを知った宇和島藩の前藩主宗紀は、実娘正姫への種痘を依頼した。そこで、弘化4年（1847）2月に、玄朴は江戸の宇和島藩邸にて、正姫に人痘種痘を施した。

『伊東玄朴伝』にはこの接種は、2月8日とあるが、『藍山紀』巻11（宇和島市立図書館）の弘化4年2月8日の項には、「昨夕伊東玄朴正姫殿に種痘す」とあり、種痘実施は2月7日夕ということになり、1日の違いであるが『伊東玄朴伝』の訂正が必要である。

宇和島藩主宗城は、この玄朴の人痘種痘について、国元にあてた手紙（A）で、正姫の天然痘発症が軽症で収まったのは種痘のおかげであると喜び、伊東玄朴については「同人申すごとく万端滞りなく相済み、実ニ感心せしめ候、余程、熟達候事にて、生涯の安心候」と伊東玄朴の手際の高さとその医術の力量の高さを称賛している。そして、伊東玄朴のもとで前年から修業している藩医富沢礼中が帰国したら、藩内にこの種痘をひろめたいと述べている。

嘉永2年に牛痘苗が長崎に伝来し、佐賀城下で藩主の子淳一郎に実施し、それが藩主の江戸参府に随行した藩医島田南嶺らによって、江戸に伝えられ、伊東玄朴が11月に貢姫（みつひめ）に接種し成功した。

さらに、玄朴は、その痘苗である痘痂や牛痘針などを、伊達藩主の求めにより、門人の宇和島藩医富沢礼中に手紙（B）とともに送っている。玄朴が富沢礼中にあてた手紙（B）のなかに、江戸への伝播について新しい事実が載っているので紹介する。

御無音申上候、愈、御万吉被成勤奉恭賀候、此方閤宅（こうたく、自宅）無事、御降念可被下候、然ば当夏は長崎表牛痘舶来有之、追々伝播、東都（江戸）へも十月二日、弊藩（佐賀藩）に参り、夫れより追々弘まり、千人余も種立（うえたて）に相成申し候、誠に古今の良法、小生も追々試み、既に百三十人余実験仕り候、京坂も殊之

外、盛んの趣きに御座候、則ち、牛痘痂並びに牛痘針等差し上げ、牛痘書相添え差し上げ申し候、早速御試可被成候（下略）

手紙（A）、（B）とも、藤田正「宇和島藩における種痘の普及」（財団法人土佐山内家宝物資料館研究紀要第9号、2010年に所収）。

この伊東玄朴書簡によると、この夏に長崎にもたらされた牛痘苗は、各地へ「追々伝播」し、10月2日に江戸の佐賀藩邸へ到着後は、市中での牛痘苗による種痘が広がりを見せ、千人余りの人々にこの種痘が施され、玄朴自身も130人余りの人々に施術したとのことである。この牛痘種痘は京都や大坂でも盛んに行われている。そこで玄朴が、礼中に牛痘痂・牛痘針等差し上げる、牛痘書を添えて宇和島へ送るので早速試みるとよいだろうという内容の手紙である。

『鍋島直正公伝』によれば「九月の参府に際して島田南嶺に命じて、その痘種をもたらさしめ、江戸邸着後、伊東玄朴の女に之を植ゑしめ、十一月更に其種を採って、貢姫に種痘せしめられたり」とあり、9月の参府と、貢姫への11月に玄朴によって実施されたことは知られていたが、藩邸への到着日は不明だった。この手紙により、9月の江戸参府に随行した島田南嶺により、江戸の佐賀藩邸に10月2日にもたらされたということがわかった。我が国種痘史の欠を補う事実である。

## 展示案内

### 「九州の蘭学・武雄の蘭学」展

平成26年2月1日（土）～3月16日（日）

学芸員によるギャラリートークは、2月11日（火）、2月23日（日）、3月8日（土）のいずれも13時30分からです。

★武雄の蘭学資料は、まさに九州だけでなく我が国の最初期の蘭学資料であり、我が国の宝モノです。ぜひおでかけください。



## 展示案内

# 「医は仁術」展のお知らせ 医の原点は江戸にあった！

新発見！『杉田玄白の直筆の漢詩』『日本最古の解剖原図』世界初公開！

日本の医学・医療は世界の最先端と言われていますが、その始まりは江戸時代にあります。山脇東洋が日本初の人体解剖を行い、その情報により各地で解剖が行われるようになりました。また1774年、杉田玄白らが翻訳した『解体新書』は、蘭学が急速に日本中に広まるきっかけとなりました。人々を救うために、正しく人体がどのような構造であるかの解明が、漢方医らも含めて始まったのです。

本展では、当時の希少な解剖図などの史料の他、江戸時代の医療道具等も展示し、中国から来た漢方と西洋から来た蘭方が、「医は仁術」が実践された日本で、いかに独自に発展して人々を救ってきたかを探ります。

また、最先端医療では、人体の可視化をテーマに3Dプリンターによる臓器モデルなど、日本が世界に誇る技術を紹介します。77年ぶりに発見された杉田玄白らの直筆掛軸や山脇東洋の『蔵志』原本が初公開となります。

開催日時 3月15日（土）～6月15日（日）

場所 国立科学博物館（東京・上野公園）

時間 午前9時から午後5時まで（金は午後8時まで）

詳細は国立科学博物館ホームページを御覧ください。

<http://ihajin.jp/midokoro.html>

## シンポ案内

# 『解体新書』特別展示！！

来る2月22日（土）13時から、佐賀大学経済学部4号館で、第6回地域学シンポジウム「日本医学史上の佐賀」が開催されます。講師・演題は青木歳幸「佐賀藩医学史の研究」、酒井シツ「近代医学黎明期の日本医療史」です。講師の酒井シツ先生は日本医史学会の前理事長で、日本医学史・日本医療史の我が国の第一人者です。『医業免札姓名簿』を30年ほど前の好生館調査ののりに見いだしてくれた佐賀藩医学史研究にとっても恩人の先生です。

このシンポジウムに先立って、菊楠シュライバー館（地域学歴史文化研究センター）展示室において、11時30分から13時まで、センター所蔵の『解体新書』の特別展示を行います。

また、当日18時30分からホテルマリターレ創世で懇親会が開かれます。懇親会の申込みは2月10日までにセンターへ電話かFAX0952-28-8378、またはメールで申し込みください。詳しくは、下記または添付ファイルで御覧ください。 <http://rekideta.cc.saga-u.ac.jp/pdf/sinpo.pdf>

## 編集後記

▼第59号をお送りします。展示では武雄と国立科学博物館の展示に注目。近くでは2月22日のシンポに先だっの『解体新書』特別展示もぜひお出かけ下さい。▼最近の新聞記事で、京博の村上隆さんが「卑弥呼の鏡」を3Dプリンターで復元して魔鏡だった発見や、京外大の松田清さんが、山本読書室の史料に西南戦争の暗号文や江戸攻めへの和宮の嘆願状などの発見が載っていました。お二人ともセンターの特命教授もやっていただいております。▼日々、学術の進展を感じます。体調をくずさぬよう御自愛ください。（青木）